【ねがいましては】

平成２０年６月２５日　　*KYOWA SCHOOL*
第２１２号

「出会う」

よく私はラジオをつけたまま寝てしまうことがあるのですが、その日はたまたま明け方４時頃にうとうとと目が開き始めました。その時ですが、スピーカーからどなたかはわからないのですが、教育論のようなお話が聞こえてきたのです。うる覚えなのですが、子を育てるときには次の三つの事をしっかりしつけなさいというような内容でした。

一つ目・・・朝起きたら、まず親にあいさつをする。「おはようございます。」

あいさつは人と人との大切なつながりを構築する上で最も大切なはじめの一歩。家族間でこのことが習慣化されますと、やがて子が社会（学校）へ旅立つとき、子は多くの友だちに囲まれ、多くの教師たちに可愛がられます。子はやがて人々の温かい心根に触れながら、豊かな幅のある「人」へと成長していきます。

二つ目・・・「ハイ」という返事。

これも人と人との関係にはなくてはならないものです。相手に何かを伝えるとき、最後に「ハイ」という元気な返事が返ってくると、伝える方も気持ちのいいものです。そして「ハイ」と返事をした当人も気合が入ります。掛け声のひとつになるわけです。「よし、がんばってみよう！」

三つ目・・・くつをそろえなさい。

私が完全に目を覚まされた止（とど）めの一発でした。思わずこころが唸ってしまったのです。

やがて家族のもとを離れるときがきます。違う家族の家（友だちの家）に入るときがきます。または違う組織（会社）のもとに入るときがきます。そのとき、その家の人たちがまず思うこと・・・くつがそろえてある・・・。「この人はこころのきれいな人だ。」「この人なら信頼に足るものがある、任せよう・・・。」

人と人が、その関係の間に「信頼」を共有しあえたとき、ゆるぎない安心感を抱くことになります。お互い助け合いながら、社会の中の一員として生き生きと生活する姿が浮かびあがります。

その日、私はその三つの言葉を発していた方を探すべく、ＰＣ画面に向かいました。

この方かな、結局見つからなかったのですが、ふと目の前に現れた本、「小さな人生論」藤尾秀昭（致知出版社）・・・早速注文しました。

実はこの中に先ほどの三つの言葉はなかったのですが、またまた素晴らしい出会いがありました。

ある小学校教師が５年生になる男子児童の担任になった。どうしても好きになれなかった。なぜなら服装が不潔でだらしなかったのです。その先生は少年の悪いところばかりを書き留めるようになりました。ある日、その少年の１年生からの記録に目が行きます。「朗らかで、友だちが好きで、人にも親切。勉強もよくできる・・・。」２年生、「母親が病気になり毎日世話をする。時々遅刻する。」３年生、「母の病が重くなり、看病疲れか時々居眠りをする。」やがて３年生後半には「母親死亡、希望を失い、悲しんでいる。」４年生、「父は生きる意欲を失い、アルコール依存症になり、子どもに暴力をふるう。」

その先生は胸に激しい痛みを感じることになります。深い後悔の念に襲われます。そして先生は少年に声をかけます。「先生は夕方まで教室で仕事をするので、あなたも勉強しない？」少年は初めて笑顔を見せます。それから毎日少年は予習復習を始めました。

あるクリスマスの午後、少年が先生にとプレゼントを持ってきました。少年の母親が使っていたに違いない香水だったのです。先生はその香水の一滴をつけ、夕暮れ少年の家を訪ねました。少年は飛んできて先生の胸に顔をうずめます。「おかあさん・・・。」

それから６年、カードが届きました。「明日は高校の卒業式です。おかげで医学部に進学できます・・・。」

それからまた１０年が過ぎ、またカードが届きます。「僕はよく先生のことを思い出します。僕を救ってくださった先生は神様のようです・・・。」そして翌年、またカードが届きます。

そのカードは結婚式の招待状でした。そしてその中には一言「母の席に座ってください」とありました。

５年生の少年の胸に刻まれた深い愛情は、やがて強い生きる力となりました。その先生が勉強を教えたことは事実ですが、少年を支えた最も大きなものは、「僕には先生がいてくれる」なのです。

子が母からの深い愛情を受け、自らの人生に目標を掲げ、力強く生きる・・・。「勉強しなさい」「まだ宿題終わらないの」「○○ちゃん、毎日しっかり勉強してるってよ！」・・・毎日繰り返す母から子へのことば・・・。

子が求めているものは・・・・・

きょうも早くからテスト勉強をしに、中学生たちがやってきます。「こんにちは・・・。」

あなたがたの居場所として使ってください。私自身も居場所になっているのかな・・・。ありがとう。